名古屋外国語大学論集　第10号　2022年2月
特集：名古屋外国語大学におけるアカデミック・スキルズ・プログラムの現状と展望

アカデミックスキルズとともに
―「国教生」であるということは「国教生」になるということである―

With Academic Skills:
To Be a Student of “Kokkyo” Is *to Become* a Student of “Kokkyo”

根無一信
Kazunobu NEMU

はじめに

本稿は名古屋外国語大学現代国際学部国際教養学科（通称「国教」）で行われている初年次教育「アカデミックスキルズ」の授業内容を紹介することを目的とする。この科目は全学共通の必修科目であるが、学科によって様々な形態がとられている点で学科の個性が出る科目であるともいえる。国際教養学科のアカデミックスキルズは、学科生が口を揃えて言うように「厳しい」ものである。あとで詳述するように、年間四回のプレゼン、それに伴うレジュメの作成、学期ごとに課される四〇〇〇字以上のレポート、そしてそのそれぞれに対して要請される一定の厳格な学術的な作法――すわなち、アカデミックスキルズ――。学科生にとっては「やりたくない」「大変な」授業の代表格であろう。しかし、これが国際教養学科である。「国教生」は初年次から徹底して「国教生」であることが求められる。実のところ、すぐ上で取り上げた「厳しい」「やりたくない」「大変な」という学科生の本音は、正確には「厳しいが身になる」「やりたくないけど、大事なことが学べる」「大変だけどみんなやるべきだ」という積極的な評価として語られている。この点は最大限に強調されるべきであろう。国際教養学科のアカデミックスキルズとはどのようなものなのか、詳細に紹介することにしたい。

本稿は以下のように進められる。まず、アカデミックスキルズの時間割や授業運営、授業形態などといった基本的な枠組みを紹介し（第一節）、次に授業内容を紹介する。国際教養学科ではI期とII期では異なる内容の授業を行うので、I期の授業内容と（第二節）、II期の授業内容（第三節）についてそれぞれ丁寧に見ていくことにしよう。最後に、学科生の声にも耳を傾けつつ、アカデミックスキルズの目指す理想がどの程度達成されているか考察し、成果と課題を取り出したい（第四節）。

第一節　基本的な枠組み

国際教養学科では専任教員がアカデミックスキルズを担当し学生の指導にあたる。学科の学生を八クラスに分け、各クラスに一名の専任教員がつき、クラス単位で授業を行うことを基本とする。授業は木曜日の三時間目と四時間目にそれぞれ四クラスずつ設置されている。国際教養学科の専任教員は一一名であるから、アカデミックスキルズを受け持たない教員もいる。逆に、一人で三時間目と四時間目の計二クラスを担当する教員もいる。

八クラスへの振り分けは学籍番号順に行い、例えば今年度であれば新入生は約一〇〇名であるから一クラスあたりの人数は一二～一三名になる。学生はI期もII期も同じクラスメンバーで授業を受けるが、担当教員は学期によって受け持つクラスを換える。なお、再履修生用の特別なクラスは用意しないので、再履修生がいる場合は一年次生のクラスに組み込み、一年次生とともに授業を受けさせることになっている。従って、クラス内の人数は多少増える可能性がある。また、科目全体としてクラウド型教育支援サーヴィスmanabaを用いて運営され情報共有が図られるが[1]、クラス別の独自のプラットフォームも設置される。教員によってはmanabaを用いる場合もあるし、別のもの、例えばgoogle classroomを用いる場合もある。クラス別プラットフォームについては教員に一任されている。

さて、アカデミックスキルズの授業自体は木曜日の三時間目と四時間目であるが、五時間目の時間帯には担当教員全員によるミーティングが実施されている[2]。このミーティングは毎週行われ、受け持ちクラスの学生についての

情報や、授業で出た問題などを担当教員全員で共有することを主な目的としている。特に昨年度（二〇二〇年度）の場合は、コロナ禍における特殊な状況にあって始まったオンライン授業への対応という点でも、このミーティングが果たす役割は大きかった。また、若手教員がベテラン教員から学ぶ場でもあるし、教員同士の連携を強める機能も果たしており、クラス毎に生じかねない様々な「ばらつき」は、結果的にかなりの程度抑えられているように思われる。学生から「先生によって全然違う」「私のクラスは損だ･特だ」というような意見を聞くことはほとんどないからである[3]。

最後に学期中の流れについて確認しておこう。I期もII期も基本的な授業形態は「クラス別」の「演習」であるが、各学期冒頭の数回は「全体講義」が行われる。木曜三時間目の四クラス、四時間目の四クラスが、それぞれの時間に合同で授業を受けることになる。この「全体講義」の回が終わると、クラス別の授業に移行する。そして、クラス別授業の回が終わると再び合同での授業が実施され、各クラスから代表者を一名選出して「代表プレゼン」が行われる。I期もII期も「個人プレゼン」を軸にし、学期末のレポート提出を最終課題とする。本節の要点を以下にまとめておく。

- ●専任教員が指導する。
- ●学科の学生約100名を学籍番号順でクラス分けし、クラス単位で授業を行う。
- ●各クラス12名～14名（再履修生も含む）で、合計8クラス。（国際教養学科の専任教員は11名なので、アカデミックスキルズを担当しない教員もいる）。
- ●木曜3時間目に4クラス、4時間目に4クラスが開講される。
- ●基本的に教員1人につき1クラス担当であるが、2クラス担当（3･4時間目に1クラスずつ）の教員もいる。
- ●木曜の5時間目は、担当教員全員が毎回集まってミーティングを行う。
- ●I期もII期も、全体講義→クラス別演習→全体での代表プレゼン、という流れである。

第二節　I期の授業内容

では、授業の細部について見ていこう。I期では「企業研究の成果に基づく個人プレゼン」が中心になる。

A）全体講義（全三～四回）

I期の授業は大学に入学したばかりの新入生に対して行われるわけであるから、全体講義はアカデミックスキルズについてのガイダンスの意味を越えて、大学での学び、そして国際教養学科での学びとは如何なるものかといった「国教生としての心構え」を折に触れて伝える場になっている。こういった内容は入学後の学科別オリエンテーションの中で既に学生に伝えられているが、アカデミックスキルズを専任教員が担当する国際教養学科では、全体講義が改めて「国教生」としての自覚を促す機会になっている。

I期における全体講義の内容は「地域的・世界的な視座を持つ」「社会の問題に向き合う姿勢」「情報収集の方法・図書館の利用法」「資料の作り方やレポートの書き方」「企業研究の手法」「データ分析」といったものである。また、教科書として編まれている『学びの技法』[4]や、「国際教養学科版　レポート／論文執筆の手引き」という小冊子も随時参照される。I期には学期冒頭の三～四回がこの全体講義に充てられる。

B）「グループプレゼン」（全二回）

全体講義が終わるとクラス別授業に移行する。教室もこれまでの大教室から小教室へ変わる。クラス別授業の中心は「企業研究の個人プレゼン」であるが、その前に全体講義で学んだ理論を実践する練習の意味も兼ねてグループプレゼンテーションを全二回で行う。

テーマは「企業研究」ではなく、「世界の問題･日本の問題」である。クラスを四グループに分け、「世界の問題」に二グループ、「日本の問題」に二グループを担当させ、「世界の問題」と「日本の問題」についてキーワードが書かれたリストから、各グループが一つのテーマを選ぶ。リストには、例えば「世界の問題」については、「環境問題」「紛争」「社会、人の移動」などと

いったカテゴリーがあり、そのそれぞれに「CO2排出・絶命危惧種・プラスチックごみ」「パレスチナ問題・クルド人問題・ウクライナ情勢」「感染症・難民問題･移民社会」といったキーワードが書かれている。「日本の問題」については、「労働」「社会」「政治経済」などのカテゴリーがあり、そのそれぞれに「非正規社員・外国人労働者・働き方改革」「少子化・待機児童・同性婚」「女性のエンパワーメント・データ捏造・普天間基地問題」などのキーワードが並ぶ。カテゴリーにしてもキーワードにしても、これはほんの一例であって実際はもっと多くのカテゴリーとキーワードがあるので、クラス内でテーマが重複しないようにし、各グループはこのキーワードからプレゼンテーマとして一つを選択する。ワードファイルで二頁以内（参考文献表は除く）のレジュメを作成し、発表週の月曜日中にmanabaへ提出することを義務とする。一回の授業で二グループが登壇してプレゼンを行う。持ち時間は一五～二〇分で、その後質疑応答が行われる。グループプレゼンは以上のようなものである。

C)「企業研究」の個人プレゼン（全六～七回）

全二回のグループプレゼンが終わると、I期の中心テーマである「企業研究」に移る。一年次生に「企業研究」を課すことには理由がある。それは、「豊かな教養、キャリアに関わる高い専門性、高度な英語運用能力とともに豊かな共感能力と国際感覚を涵養する」という現代国際学部のカリキュラムポリシーに即して、「キャリア」を意識した教育を行う意図があるからである。シラバスの授業概要においても、I期のアカデミックスキルズについては「自らのキャリアプランを構築するために必要な知識と思考方法を身につける」点が銘記され、国際教養学科はキャリア教育を重視する現代国際学部の特徴をアカデミックスキルズにもよく反映させているといえるだろう。

さて、三時間目の四クラスと四時間目の四クラスの計八クラスにおいて、受講生は全員異なった企業を研究することになる。それゆえ、候補となる企業は一〇〇を超える。例えば二〇二一年度の場合、「メーカー」「商社」「旅行」「ホテル」「航空会社」など計一六のカテゴリーのそれぞれに、計八クラ

ス分の異なった企業があてがわれ、合計一二八の企業が候補リストに挙げられている。各クラスには各カテゴリーから一つずつピックアップされた一六企業があらかじめ割り振られており、クラスのメンバーはそれらの一六企業の中のどれかを担当することになる。学生の負担を考えると担当企業の決定は早い方が望ましいため、全体講義期間中のどこかの回で担当企業を決めるようにしている[5]。

個人プレゼンは授業各回に二人ずつ行われる。発表者は事前に作成したレジュメをmanabaへ提出し、当日の発表は一人あたり一五分で、発表後には質疑応答が行われる。レジュメに関してはグループプレゼンの時と同様に、参考文献表を除いて二頁以内で作成し、発表日の一週間前に提出することが義務付けられる。早めに提出させるのは、発表日に活発な議論ができるように発表者のレジュメをクラスのメンバーに事前に読ませたいという意図に基づいている。

D)「代表プレゼン」(全一回)

受講生全員の企業研究プレゼンが終わると、「代表プレゼン」が行われる。これは全体講義と同じく、三時間目には三時間目の四クラスの合同授業、四時間目には四時間目の四クラスの合同授業の形態で実施される。各クラスから一名の代表者を出し、それぞれの時間に計四名ずつの代表者が自分の「企業研究」についてのプレゼンを行う。代表者は個人プレゼンの際に行われた質疑応答や教員からの指摘などを反映させて磨きをかけた「修正版企業研究」を、学科生約五十名と教員たちの前で披露する。代表者の決め方は各クラスによって異なるが、おおむね学生側の投票によっている。代表者は他の学生よりも一回分多くのプレゼンを行うので、その分負担は大きくなるが、大人数の前に立つ貴重な経験であるし、各クラスの担当教員以外の教員からのコメントを得られる点でも大きな収穫があるだろう。また、「代表者」の存在そのものが、その高いレベルに刺激を受けた他の学生に「国教の代表」という具体的な一つの「理想像」を身近なところで意識させる役割も果たしている。

I期の最終課題は、個人プレゼンで行った企業研究の内容をもとにした学期末レポートである。文字数は四〇〇〇字以上で、参考文献表や脚注の文字数はこれに含めない。また、成績評価は「レポート」五〇％、「グループプレゼン＋個人プレゼン」四〇％、「授業への貢献」一〇％である。レポートの文字数が四〇〇〇字に満たない場合や、レポート、グループプレゼン、個人プレゼンのどれかが欠ける場合は単位不認定となる。以下にI期の授業内容の要点をまとめておく。

●学期始業後最初の3〜4回は合同授業による「全体講義」を行う。
●それ以降は各クラスに分かれる（教室も変更）。
　—クラス別授業の前半2回：グループプレゼン（世界の問題・日本の問題）
　—クラス別授業の後半6〜7回：個人プレゼン（企業研究）
●最後に再び合同授業を実施し、各クラスの「代表者」による「代表プレゼン」を行う。
●成績評価：レポート50％、グループプレゼン＋個人プレゼン40％、授業への貢献10％。

第三節　II期の授業内容

II期の授業もI期と同様、全体講義→クラス別授業→代表プレゼン、という流れで構成されているが、中心となる課題が異なっている。II期は「課題図書の輪読に基づく個人プレゼン」と「自由なテーマ設定による個人プレゼン」の二本立てになる。

A）全体講義（全一〜二回）

II期の全体講義もI期と基本的に同じである。学期冒頭の一〜二回が全体講義にあてられ、「批判的な思考」や「問いの立て方」などについての指導が行われる。全体講義は単なるガイダンスにとどまらず、国際教養学科生としての自覚を促すものである点でもI期と同様である。

B）指定文献の輪読（全四～五回）

全体講義の後、クラス別授業に移行する。クラス別授業はその内容の点で前半と後半の二つに分けることができる。前半は「指定文献の輪読に基づく個人プレゼン」であり、後半は「自由なテーマ設定による個人プレゼン」である。一回の授業における担当者は前半の「指定文献の輪読」では三名で、それぞれに一〇分の持ち時間が与えられる。後半の「自由テーマのプレゼン」では二名で、持ち時間はそれぞれ一五分である。いずれもプレゼン後には質疑応答が行われる。

前半の「指定文献の輪読」では、あらかじめ書籍一冊の内容を一二～一四に分割し、クラスメンバーの各々に担当箇所を割り当てておく。担当者は発表日の一週間前にレジュメをmanabaへ提出する。レジュメの仕様はI期のグループプレゼンや企業研究と同じであり、参考文献表を除いて二頁以内である。内容的には、担当箇所の要約を必ず盛り込ませた上で、疑問点や興味を引かれた点などを独自に追究するものとなる。

指定文献の選定に関して一言しておこう。文献は担当教員から候補を募り、その中から一冊を選ぶ。内容的に「世界」「歴史」「現代の問題」のいずれにも関わっているもの、そして「人間」と「文化」そして「社会」についての視野を広げる可能性のあるものであればなおよしという基準によって選定されるが、大学初年度の学生のレベルに適当なものが望ましく、おおむね新書が用いられる場合が多い。例えば、岩波新書の鶴見良行著『バナナと日本人』や、中公新書の角山栄著『茶の世界史』などである。文献は毎年別のものを用いることを基本とするが、同じものを再度用いる場合もあり、その時その時の時勢や教員の関心に鑑みて柔軟に選定されている。学生には、遅くともI期の学期末には指定文献を周知し、購入させている。

C）「自由テーマ」（全六～七回）

輪読が終わると、次なる課題へ移行する。「自由なテーマ設定による個人プレゼン」である。クラスメンバー各々がプレゼンのテーマを自分で決めるのである。テーマには特に制限を設けないので、学生各々の個人的興味が全

面に押し出され、たとえば昨年度のテーマをいくつか挙げると、国際協力を学ぶために国際教養学科を選んだ学生による「カンボジアが抱える子供の教育問題」といったものや、ファッションに興味のある学生による「なぜユニクロは人々に受け入れられたのか」、芸術に興味がある学生の「「アートの島」直島」といったものから、甲子園球場のグラウンド整備を行う会社をテーマにした「阪神園芸」といったものまで、百花繚乱の様相を呈することになる。

テーマ選定に制限はないが、しかしその扱い方には制限がある。I期とII期を通して培ってきた学術的作法すなわち「アカデミックスキルズ」に基づかねばならない。問いの立て方、議論の進め方、分析の仕方、参考資料や参考文献の使い方、レジュメの構成力や文章力、プレゼン時における話す力、質疑応答での対応力といったような「アカデミックスキルズ」が問われることになる。なお、他の課題と同じくレジュメは参考文献表を除いて二頁以内で作成し、発表日の一週間前にmanabaへ提出する。

D)「代表プレゼン」(全一回)

I期と同じように、受講生全員の「自由テーマのプレゼン」が終わると、「代表プレゼン」が行われる。代表者が行うプレゼンは「輪読」に関するものではなく、「自由テーマ」に関するものである。それ以外の形式や内容はI期と同じである。

II期は、「自由テーマ」の個人プレゼンをもとにした学期末レポートの提出が最後の課題となる。文字数はI期と同じく四〇〇〇字以上で、参考文献表や脚注の文字数はこれに含めない。また、成績評価は「レポート」五〇%、「個人プレゼン二種」四〇%、「授業への貢献」一〇%である。レポートの文字数が四〇〇〇字に満たない場合や、レポート、個人プレゼン二つのどれかが欠ける場合は単位不認定となる。以下にII期の授業内容の要点をまとめておく。

●学期始業後最初の1〜2回は合同授業による「全体講義」を行う。
●それ以降は各クラスに分かれる（教室も変更）。
　—クラス別授業の前半4〜5回：指定文献の輪読に基づく個人プレゼン
　—クラス別授業の後半6〜7回：自由テーマに基づく個人プレゼン
●最後に再び合同授業を実施し、各クラスの「代表者」による「代表プレゼン」を行う。
●成績評価：レポート50％、個人プレゼン2つで40％、授業への貢献10％。

第四節　アカデミックスキルズの成果と課題

以上、国際教養学科で実施されているアカデミックスキルズの形式と内容について見てきたので、最後にその成果と課題について触れておきたい。成果と課題を知るには学生側の反応を調べることが一つの有効な方法であるだろう。そこで筆者は本節を執筆する際に筆者のゼミに所属する二〜四年次生にインタビューし、忌憚のない意見を述べてもらった。学科を挙げての本格的な調査を行ったわけではないにしても、本節を導くには十分な回答が得られたと思われる。ゼミ生の言葉を「」付きで盛り込みながら簡単な考察を行うことにしよう。

ゼミ生全員に一致が見られたのは、本稿冒頭で既に触れたところの「厳しいが身になる」という点である。同様の評価を「大変だけど全員がやるべき」と表現したゼミ生もいた。具体的にはプレゼンの方法、レジュメの作り方、レポートの書き方といった面での直接的な成長を感じているようである。というのも、一年次生の段階ではこういった内容の課題を初等・中等教育で全く経験していないため、「まったくの手探り」の状態から出発している場合が多いからである。実際に授業では、回を重ねるごとにレジュメの内容やプレゼンの仕方は目に見えてよくなっていくので、教員やクラスメンバーから指摘された改善点は、当人だけでなく他のメンバー全員で共有されており、各々が互いに学び合っていることがわかる。「手を抜けばすぐにばれる」という意見を述べたゼミ生もいたように、手抜きのプレゼンに対しては教員や

クラスメンバーから容赦のない質問や批判が出る雰囲気が国際教養学科のアカデミックスキルズにはある。従って、妥協せずに取り組む学科生にとっては準備に時間がかかり、「他の科目への影響が大きかった」という苦しさもあるが、収穫は大きいと見てよいだろう。特にレポートやレジュメについては、いつの間にか他学科・他学部の学生に大差をつけることができていると本人たちは感じているようである。国際教養学科生からこういった意見を引き出せたことは、アカデミックスキルズが一定の成果を上げていることの証左であると見てよいだろう。

しかしながら、この成果を成果として認識するにはかなりの慎重さも必要である。というのも、学生自身がいくら「成長した」と感じていても、残念ながら教員の目にはそうは見えない場合があるからである。一般的に色々な科目において、二年次生以上の学科生からもかなり多くの問題を含むレポートが時々提出される事実に目をつぶるわけにはいかない。アカデミックスキルズがその後の学究活動に活かされているような学生もいれば、そうでない学生もいる。その違いは何に起因するのだろうか。この問題は、「結局、できる学生はできる」というような一般論に回収されてしかるべきなのだろうか。それとも、アカデミックスキルズに固有の問題として解決可能なのだろうか。

この点に関する考察は本稿の射程を大きく超え出るものであるが、一定の見通しを立てることはできる。話題をレポートに限定するが、最後に筆者の見解を述べておきたい。この問題は、一般論ではなく、アカデミックスキルズ固有の問題として、かなりの程度改善の余地があると筆者は考えている。手掛かりは、アカデミックスキルズの課題として学期末に提出されたレポートにある。このレポートは担当教員によって丁寧に添削され、翌学期に学生へ返却される。しかし、教員によるこの添削が最大限に活かされるためには、その添削内容に従って「もう一度本気で同じレポートに取り組む」ことが必要なのではないか。ダメな箇所を意識して改稿するという反復作業が課題克服にとって重要なのではないか。筆者はこのような問題意識から、二年次生対象の基礎ゼミナールで、前年度II期アカデミックスキルズの「自由テーマ」の

レポートをゼミ生全員で検討し、その場での質疑応答の内容を踏まえた「リライト版」を提出させるという授業を行っている。予想通り、その成果には目を見張るものがあり、驚くほどの成長を全員が見せている。継続的な指導の重要性を改めて確認することができるだろう。このことに関連して、II期の「指定文献輪読プレゼン」についても同様の指摘が可能である。この課題はプレゼン後の質疑応答の段階で終わって次の「自由テーマ」へ移行するので、学生は「宙ぶらりんになってしまっている」という印象を持っている[6]。これもまた見逃すことができない事実だろう。いずれにしても、現状では各教員のフォローによるしかない。「リライト版の作成」というこの作業を、学科生共通の課題としてアカデミックスキルズの授業内に組み込んでしまうような授業計画を立てられるだろうか。あるいは別のなんらかの方法があるだろうか。一考の余地ありとしたい。

おわりに

アカデミックスキルズは、アカデミックな作法を学ぶというこの科目の定義の点から言って他の全科目の土台である。従って、学科生は他の全ての科目をアカデミックスキルズというフィルター――このフィルターはアカデミックスキルズを専任教員が担当している国際教養学科の場合、それだけ学科の特性をより強く帯びている――を通したものとして身に着けていくことになる。とするなら、学科生にとっては大学全体がアカデミックスキルズを通して国際教養学科化されたものとして表象されることになろう。国際教養学科生にとっては大学全体がすでに国際教養学科なのである。それゆえ、国際教養学科生は国際教養学科生として国際教養学科を生きるほかない。こうして国際教養学科生は、アカデミックスキルズとともに、アカデミックスキルズを通じて、国際教養学科生になっていく。

本稿の冒頭で紹介した「厳しいが身になる」「やりたくないけど、大事なことが学べる」「大変だけどみんなやるべきだ」というゼミ生の言葉は、「国教生」になっていく経験について語られた言葉であるだろう。最初から「国教生」である「国教生」はいない。どの「国教生」も「国教生」になっていく

のであり、また、なっていかねばならない。「国教生」であるということは、「国教生」になるということなのである。

注

1 manabaを用いるのは2021年度からであり、それ以前はmoodleを用いていた。
2 担当教員はこの時間帯を「空きコマ」にし、授業を入れないようにしている。
3 この「ばらつき」に関して学生から指摘を受けることもあるが、それは授業内容そのものに対してであるよりは、むしろ教員の性格に向けられているように思われる。
4 名古屋外国語大学現代国際学部国際国際教養学科編［2019］『学びの技法―地域を読み、世界を拓く10章』名古屋外国語大学出版会。
5 担当企業の決め方は担当教員によって異なるが、時間的な制限もあるためクジを用いる場合が多い。
6 「グループプレゼン」についても同じ問題が伏在しているといえるが、ゼミ生からは特に意見は出なかった。